

研究課題	Mahāvastu の写本及び校訂研究
研究代表者	平林二郎 (仏教研究科博士後期課程仏教学専攻)

## I. 研究の目的

本研究の目的は仏教梵語の代表的な文献である Mahāvastu (Mv.) について、現在使用されているテキストと、新たに発見、出版された写本を比較し、写本の詳細、内容の違い、系統などを明らかにし、再校訂もしくは diplomatic text を作成することを目的としている。また、その過程において Mv. で使用されている、Buddhist Sanskrit あるいは Buddhist Hybrid Sanskrit (BHS.) と呼ばれる言語についても、特殊な用例の収集をおこない、他の大乘文献、Pāli 文献などと比較し、不明な部分の多い Mv. の文法を体系化していきたいと考えている。この他、Mv で使用される語彙や韻律についても、写本から研究を進めることで明らかにしていければよいと考えている。

### Mv. の概要

Mv. は Mahāsāṃghika-lokōttaravādin (大衆部の説出世部) に属する律蔵文献であると考えられ、“十地思想” や “多仏思想” などといった、大乘仏教的な内容が説かれることから、大衆部およびインド仏教を研究する上で重要な位置にある文献である。しかし Mv. には他の大乘経典などのように、漢訳やチベット語訳は存在せず、大部であり全貌も把握し難く、使用言語、韻律についても不明な部分が多く、問題が複合的に絡み合い、研究は進んでいるとは言い難い現状となっている。

Mv. の構成は仏伝が中心になっている。平岡聡氏の「Mahāvastu-avadāna の構造」(『佛教研究』第 29 号, 2000) を参考に、仏伝の出来事を挙げると、燃灯仏の授記から始まり、ゴータマの降誕、青年期、宮廷生活、出家、苦行、マーラの誘惑、成道、梵天勸請、ベナレスへ移る、初転法輪、ビンビサーラ王との対面、カピラ城入城、ヴァイシャーリーに訪問し疫病を治すまでが説かれており、出来事に関連する Jātaka が挿入される形式となっている。しかし、Mv. の構造は複雑であり、これらの出来事は実際の順序通りに説かれておらず、話が途中で終わってしまったり、さらに文脈的に何故そこに組み込まれているか不明確なものも含まれているのである。

### Senart 校訂本と 6 写本

Mv. の文献学的研究は Émile Senart によって 3 分冊の校訂本 (Le Mahāvastu, vol.1-3. Paris, 1882,1890,1897) が出版されたことにはじまる。この校訂本は Senart が当時入手できた 6 写本を蒐集し、写本の異読や概観などを註や巻末の解説部分の Commentaire で説明する形式となっている。

Senart が校訂に使用した 6 写本に関しては、湯山明氏が論文(「Mahāvastu- Avadāna—原典批判的研究に向けて—」『国際仏教学高等研究所年報 2』, 1999) で言及している。その論文で写本の詳細が表となっているので下記に抜粋したい。

A = Société Asiatique, Paris : No.9: ed. Senart I p.1.1-p.193.12.

B = bibliothèque Nationale, Paris : No.87-88-89: ed. Senart I p.1.1-III p.463.30.

C = University of Cambridge : Add.1339: ed. Senart I p.1.1-III p.47.9.

L = Royal Asiatic Society, London : No.9: ed. Senart I p.1.1-p.193.12.

M = Collection Minayeff: ed.Senart I p.1.1-p.193.12, III p.47.10-p463.20.

N = Bibliothèque Nationale, Paris: No.90-91-92: ed. Senart I p.1.1-p.193.12.

Senart の校訂本はこれら 6 写本を使用しているが、すべての写本が参照されているのは “十地” (vol.I, p.193, l.12) までである。それ以降の “燃灯仏の歴史” (vol.I, p.193, l.13) から “ヴィジターヴィン・ジャータカ” (vol.III, p.47, l.9) までは B, C 写本の 2 写本によって校訂がなされており, “大迦葉出家経” (vol. III, p.47, l.10) 以降は C 写本の代わりに M 写本が用いられテキストの作成がなされている。

Senart の校訂本の学術的成果は大きく、1963 年に Radhagovind Basak, 1970 年に S. Bagchi によって Mv. テキストが出版されているが、両者とも Senart 校訂本を踏襲したものであり、Mv. 研究の大部分はこの校訂本に依ったものとなっている。しかし、こ

の Senart 校訂本を使用するにはさまざまな問題があると考えられる。その理由としては、Senart の校訂方法が原本を推定してテキストを作成していることから、写本の誤写であると思われる部分を古い形に修正したり、写本に従わず恣意的な部分も見受けられること、終始校訂に使用した写本は B 写本だけであること、校訂本出版後に発見された写本を使用できること、Mv. と関係する諸文献の研究成果を利用できるようになったことなどが挙げられる。したがって偉大な Senart の研究、その後の諸先学の研究の成果を踏まえた、新たな Mv. の校訂本を作成しなければいけない段階に来ているのである。

Mv. で使用される言語

Mv. で使用される言語は BHS. と呼ばれ、未だ完全に体系化されておらず問題が山積している。インドの梵語仏典に使用される言語を、最初に“Buddhist Hybrid Sanskrit (仏教混淆梵語)”と名付けたのは Franklin Edgerton であり、彼の著書である *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary* (BHSGD.) は、現在の仏教梵語研究における基準の一つとなっている。

BHSGD. において、梵語仏典は Prakrit form の使用頻度に応じて3種に分類されている。その分類は以下の通りである。

- 1 類：散文、韻文ともに Prakrit form の使用頻度が高いもの。
- 2 類：散文と韻文で Prakrit form の使用頻度が違うもの。韻文は 1 類のように Prakrit form が使用され、散文でも仏教特有の語彙を用いているもの。
- 3 類：散文と韻文ともにほとんど Prakrit form が見られず、インドの梵語仏典特有の語彙が使用されているもの。

BHSGD. において、Mv. は 1 類に属する代表的な文献として紹介され、非常に重要視されている。それは BHSGD. や同じく Edgerton が著した *Buddhist Hybrid Sanskrit Language and Literature* など、Mv. から多くの文章を本文のなかで引用、解説していることから明らかだろう。しかしながら BHSGD. などの Edgerton の著書において、Mv. を扱っている部分に関しては残念ながら現代では問題があると考えられる部分がある。Edgerton は Mv. を扱う際に Senart 校訂本を典拠として執筆をおこなっているのである。Edgerton がすべての写本を扱って執筆していれば、偉大な業績を残すことは不可能であったことは考慮し

なければならぬが、Edgerton は Senart 校訂本に問題があることを把握していたが、それらの部分について注意を喚起するだけであつたり、そのまま解説している箇所が散見されるのである。

以上のように、Mv. はインド仏教を研究する上で重要な位置にありながら、文献学的諸問題、構成の複雑さ、使用される言語などからあまり研究が進んでいなかった。しかしながら Senart 校訂本の出版以降、現在では Mv. の写本については Senart が使用した以外の写本が発見され入手可能な状態となっており、Mv. に関する研究の成果も当時と比べ多くなり研究をし易い状況となつてきている。これら先学の成果をまとめ、活用し、Mv. の再校訂・文法の体系化などをおこない Mv. をより明らかにしていくのが本研究の目的である。

## II. 研究の経過

本研究の主な内容としては Senart 校訂本の第二巻部分について研究を進めている。該当部分では釈尊の降誕、出家、成道に至るまでが説かれており、釈尊の誕生の際に三十二相が示されること、観察経では十二因縁によって覚りを開くことなど、大乘仏教において重要な要素が具体的に説かれている部分が多いことが特徴である。また、Senart 校訂本の第一巻で説かれる *dīpaṃkara* (燃灯仏) との関係も深く、*Lalitavistara* などの様々な仏伝文献との比較が可能であることから、大乘仏教の研究上極めて重要性の高い部分であると思われる。この該当箇所については藤村隆淳氏の『マハーヴァスツの菩薩思想』(山喜房, 2002.) などのさまざまな著作や論文で取り上げられ研究成果があがってきている。これらの研究成果を踏まえ、新たな写本を使用し研究を進めることで Mv. 研究を次の段階へ進めていきたい。

Mv. の研究を進展させる出来事の一つとして、湯山明氏によって 2001 年に Mv. の唯一の貝葉写本と、それに劣らないといわれる紙写本が出版された。(Mahāvastu-Avadāna In Old Palm-Leaf and Paper Manuscript, The Centre for East Asian Culture Studies for Unesco, Bibliotheca Codicum Asiaticorum 15, The Toyo Bunko, 2001.)

Sa = Staatsbibliothek zu Berlin/ Preußischer Kulturbesitz, Berlin : No. PSB2.

Sb = Staatsbibliothek zu Berlin/ Preußischer Kulturbesitz, Berlin : No. PSB30.

この Sa 写本は Senart が Cowell から伝え聞いたネ

パールの貝葉写本であると思われ、Senart が校訂本を作成する際に使用した 6 写本の原本であると考えられるものである。実際に写本を研究すると Senart が底本とした B 写本には *saṃvat 920 in the month of Aṣāḍha* と書かれており、1800 年代に書写された写本であると考えられる。一方、Sa 写本の年代は確定できないがネパール系の写本の字体などから推測すると、現在知られているどの写本よりも古い年代に書写されたことは明らかであり、この写本と現在利用できる資料とを比較することで、より古い伝承の段階にあると考えられる Mv. を理解することが可能になると考えられる。また Sb 写本は Sa 写本にも劣らないとも湯山氏が解説しているものであり、実際にこの写本の読み進めてみると、内容的には B 写本の系統に近いものであると思われるが、B 写本よりもこの Sb 写本の方が丁寧に、内容にも注意して書写されていることが明らかになってきている。湯山氏が指摘しているように Sb 写本は今後 Mv. を研究する上で欠かすことの出来ない写本であるのは疑いない。

すでに Mv. の写本についての研究としては湯山明氏が「Mahāvastu- Avadāna—原典批判的研究に向けて—」(*ibid.*)において Senart が使用した 6 写本、Sa 写本、Sb 写本について詳細な研究をおこなっているが、これらの 2 写本を実際に使用し本研究を進めていたことで、Senart の校訂との差異について多くのことがわかってきている。この点については「III. 研究の成果」で報告することとする。報告者の至らぬ点もあり、Mv. の諸写本については現在入手できるにもかかわらず、未だに入手していない写本もあり、今後も写本に関する情報を収集していきたいと考えている。

現在の写本およびテキスト研究の経過としては Sa, Sb 写本の読み進めており、その成果と Senart が校訂の際に底本として使用した B 写本を使用して、Senart の校訂本との比較を進めている。

該当箇所である Senart の校訂本第二巻部分はテキストだけで 496 頁にも上るものとなっており、Sa 写本では 114b から 270a までの約 156 葉であり、Sb 写本では 111a から 279b までの約 168 葉という量になっている。現在、これらの該当部分のなかで Sa 写本については大部分 Romanize が終了している。(一部は写本の文字が擦れて見えづらかったり、潰れてしまっている箇所などもあるため、さらに見直しが必要であると思われる。) その他の写本については現在まだ Romanize を進めている段階であるが、文法的に特殊である箇所や、語彙が不明である箇所については、

部分的に Romanize を完了させ、比較研究を進めているものもある。また、これと同時に写本から Mv. における BHS. の体系化のためのリスト化をおこなっている最中である。すでに一部の文法項目については本研究助成の成果を用い学会で発表をおこなったので「III. 研究の成果」部分で報告することとしたい。

### III. 研究の成果

本研究の成果としては、湯山明氏が出版された Mv. 唯一の貝葉写本である Sa 写本の Romanize を約 3 分の 1 程終わらせている。この他、Sb 写本についても一部の出来事の部分に関しては Romanize を終了している。また、Senart が校訂本を作成する際に使用した B 写本についても、再度確認しながら Romanize をおこなっている。Senart は校訂本のなかで B 写本の読みを記載しているが、再度この写本の Romanize を実際におこない、Senart の校訂と比較した結果、読み方を修正する必要がある箇所も多々あることがわかってきた。

次に Mv. の写本に関する成果であるが、2009 年におこなわれた大正大学の佛教文化学会において「Mahāvastu 諸写本と Senart 校訂本における差異について」という題で発表をおこなった。発表のなかで、実際に Mv. の写本を蒐集し、比較をおこなった結果として、湯山氏によって出版された Sb 写本とマイクロフィルム Takaoka A63 が同一のものであることを確認したことを明らかにしている。さらに、この他の Mv. の不完全な写本についても葉数は異なるが同一だと思われるものを発見している。このことに関しては今後論文等で報告したいと考えている。

Mv. と BHS. の関係・文法の体系化については本研究助成の成果である Sa, Sb 写本の Romanize を用いて、Senart のテキストと比較した結果、BHS. の項目において、Edgerton が不明としている部分箇所明について明らかにし、また解決できていない部分においても、今後の研究における足掛かりとなる解決方法を提示した。これらについては学会で順次発表をおこなっている。

2009 年の佛教文化学会の発表「Mahāvastu 諸写本と Senart 校訂本における差異について」では、上述したように Mv. 写本の新しい情報を紹介した他に、Sa 写本、Sb 写本、及び B 写本と、Senart のテキスト、パラレルなどと比較した結果、Edgerton が BHS. において解説している二人称の代名詞については、Ardhamāgadhī やアショーカ王碑文などに用いら

れる文法的に古い形の言葉ではなく、サンスクリット化されていた可能性が高いことを明らかにした。また、2010年の印度学仏教学学会においても上記とは別の箇所でも Mv. の人称代名詞の用例に問題があることから「Mahāvastu における人称代名詞の一考察」という題で発表をおこなう予定である。

#### IV. 研究の課題と発展

Mv. に関しては写本、内容、使用される言語、韻律、語彙など未だに解明されていない部分が多く課題は山積している。

写本に関しては、すでに述べたように、唯一の貝葉写本である Sa 写本の Romanize さえも現時点では誰も完了していない。Mv. 諸写本の系統についても、Senart の使用したものに関しては系統が分けられていが、その他の完本については湯山氏の研究以外系統は疎か、ほとんど研究がなされていないと思われる。さらに不完全な写本まで含めれば、Mv. のどの部分に該当するのかさえもわかっていないものが多く、これらの詳細を明らかにする必要がある。

Mv. の位置付けに関しても、Ernst Windisch の有名な論文である *Die Komposition des Mahāvastu* (*Abhandlungen der Königlich Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften, Philol.-hist. Klasse. 27 pp.467-511*) のなかで Mahāvagga との比較から受戒度の伝を核として作成されたことが推定されていたが、この論文の研究手法は、岡野潔氏の「マハーヴァストウの形成についての試論(1)」(『知の邂逅 仏教と科学—塚本啓祥教授還暦記念論文集』塚本啓祥教授還暦記念論文集刊行会, 1993, pp.276-280.) において Windisch は受戒度の伝との類似性を指摘しただけであることが論じられている。したがって、Mv. の成立や位置付けに関して現在定説となっているものについても、新しい研究成果を利用して再度考察する必要があると考えられる。

Mv. で使用される言語である BHS. については上記で述べたように、現在 Edgerton の BHS. の項目で引用される箇所を、Sa 写本を主に使用し比較検討している段階であり、この作業については今後優先的に終了させたいと考えている。Mv. の文法を体系化することが実現すれば、この体系を基準として、他の大乘経典においても、それぞれ文法の体系化をおこなっていくことが容易になると思われ、現在仏教学研究の一つの課題となっている大乘仏教の成立はどのようであったかなど、仏教文献に関して多くの問題を明らかにす

る足掛かりとなるものである。

Mv. で使用される韻律に関しても問題は多く、湯山明氏は Mv. の序偈だけでも Jāti 調の韻律 Ārya, Gīti, Udgīti, Upagīti, Mātrāsamaka の可能性があることを指摘している。(「マハーヴァストウ・アヴァダーナ序偈再訪覚書」『田賀龍彦博士古稀記念論集：仏教思想仏教史論集』, 2001, pp.37-38.) 序偈だけでもこれだけの可能性を考慮しなければならず、Mv. 全体ではさらに複雑な作業になると考えられる。したがって、まずこの問題については、逢坂雄美氏の『中期インド・アリアン聖典のパーソナルコンピュータによる自動解析 II』(中央学術研究所, 2005.8.) などを参考にして PC を用いて解析をおこないたいと考えている。PC だけを使用し韻律研究に利用するには問題があると思われるが、ある程度の箇所まで絞り込み、そこから実際に韻律について検討をおこなうことで、部分的にでも韻律を明らかにしていきたいと考えている。

Mv. の語彙に関しては、実際に写本を扱って読み進めると、語根などが推測できない動詞変化や、如何なる辞書にも記載されていない新出の単語を目にすることがある。また、Senart のテキストと写本で単語が違う部分、Sa 写本のみが単語が違う部分などがあり、文脈からある程度推測できるものもあるが、まったく意味がわからない単語も散見している。そのような単語については報告者の知識だけで残念ながら解決できない部分も多いと思われ、さまざまな言語の研究者と連携して研究を進めることで解決を図りたいと考えている。

Mv. 全体の翻訳については今まで J. Jone 氏が出版した *The Mahāvastu* (London, vol.1-3. 1949, 52, 56.) のみしかなく、荻原雲来氏、渡邊照宏氏、高原真一氏、白石真道氏、福井設了氏などが部分的に和訳おこなっていたが、和訳で Mv. 全体を簡単に見通すことは出来なかった。しかし 2010 年 7 月について平岡聡氏によって『ブツダの大いなる物語』(大蔵出版, 2010) という、Mv. の全文和訳が出版された。これによって日本人研究者でも容易に Mv. の全容を理解することが可能となったのである。

Senart のテキスト、Edgerton の BHS. GD., 湯山氏の写本、平岡氏の和訳などが出そろい、Mv. 研究はおこない易い状況となっている。だからといって写本、内容、使用される言語、韻律、語彙など複雑な問題が簡単に解決できるわけではないが、先学の研究を踏まえ、それぞれの部分において少しでもさらに Mv. を明らかにできるよう研究を進めていきたいと考えている。